

# シーカー7

S E E K E R 7

---

---

安部飛翔  
HISYOU ABE

## 主な登場人物

### フルール

次元を越える能力を持った時空竜。  
異世界から来訪し、スレイに懐いている。

### アイス・コルデリア

シチリア王国を統治する国王。  
厳格な性格で“氷王”の  
二つ名を持つ。

### クリス(右)&アース(左)

スレイの元師匠で、  
剣術・魔術の手解きをした。  
クリスは元宮廷騎士、  
アースは元宮廷魔術師。

### フェンリル・ノースエッジ

シチリア王国に仕えるSS級相当探索者。  
宮廷騎士団と宮廷魔術師団を束ねる。

### スレイ

本編の主人公。18歳。  
シークレットウェポンの双刀を  
操る最強剣士。二つ名は「黒刃」。

### アリシア

スレイに恋心を抱く  
トレス村の少女。  
ミレイと一緒に修行している。

### ミレイ

トレス村の村長の娘で  
スレイの恋人。  
探索者になるために修行中。

### ディザスター

EX+級の力を誇る欲望の  
邪神。蒼く滑らかな毛並み  
をした狼の姿。

# 1

大陸北方の大国シチリア王国。その片田舎。

あまり整備されていない街道の先に、一つの村があった。

周囲にはのどかな景色が広がっていた。畑や水田で汗を流し働く村人達、それを手伝う子供達の姿も見えてとれる。

農業や狩猟などにより生活を営む小さな田舎の村ではあるが、大陸の他の地域と比べ、畑や水田はかなり近代的に整備されている。それには当然理由があった。

シチリア王国の国王アイスによる政策の下、王国の宮廷騎士団長にして宮廷魔術師団長、世界でも数える程しかいないSS級相当探索者であるフェンリルが、このような田舎の村にまで土壌改善と豊潤な水源をもたらしたのだ。

お陰で、ごく一部の地域——絶対凍土を抱える寒冷地帯でもない限り、このシチリア王国では、たとえ辺鄙な田舎の村であろうと、生活に困るようなことはまずなかった。

そんな恵まれた村々の中でも、これ程大きな建物が二つも建っているのは、このトレス村ぐらい

だろう。外観こそ無骨だが、大きさと頑丈さは貴族の邸宅並みだ。村の外れにあるそれらは、場違い、という感さえあった。

そしてこのトレス村は、スレイの故郷である。

スレイは村に向かってのんびり歩きながら、どこか楽しげな声を漏らす。

「ふうん？」

『どうした主』

「なんで面白そうに笑ってるの？」

「ん？ 笑っていたか、俺は？」

ディザスターとフルールに問われ、不思議そうに首を傾げるスレイ。だがその口端は愉快そうに吊り上がっている。

二匹の言葉でそれに気付き、スレイ自身も、確かに自分は今面白いと感じていることを自覚した。

『ああ、笑っているな』

「これまでのスレイの話聞く限り、故郷に対して思い入れなんてないと思ってただけど？」

「ああ、俺もそう思ってた……つい先刻まではな。しかしどうやら俺にも、故郷に対して人並みに感慨を覚える程度の情緒はあったらしい。それが自分でもおかしくて、つい笑っていたようだな」

などと軽く答え、ますます笑みを深めるスレイ。

それはどこか子供じみていて、ディザスターとフルールの二匹は違和感すら覚える。

『ところで、だ』

そんなスレイに対し、ディザスターが問いかけた。

『大陸北方の邪神対策に向かう前に、神峰アスール火山の不死鳥の特殊個体を捕獲する、と言っていたと思うのだが、それは良いのか？』

「ああ、それが」

ひよいと肩を竦めるスレイ。

「いや、シャルロットの問題を片付けた辺りで、先にこっちの件を済ませるべきだと直感したんだ。多分、ロドリゲーニが関わっているな」

「へえー」

フルールは感心する。

「この世界で邪神の動向を予感で読むなんて……流石スレイというか。でもいいの？ 今回はスレイの力で僕達みんな一気に、ヘル王国からこの村に転移して来ちゃったけどさ、恋人達のところに寄った方が良かったんじゃないの？」

フルールがそれとなく聞くと、スレイは悪戯っ子のような笑みを浮かべる。

「ああ、それなら問題ない。今頃は各所で俺の分身……というか実質俺本人が、それぞれ恋人達と仲睦まじくしてるさ」

『は？』

啞然とした雰囲気になるデイザスターとフルール。

言葉の通り、スレイは今この時も、恋人達と楽しい時を満喫し続けているのだ。

これは、クランドとの戦いで身につけた能力のお陰だ。スレイは今や、無限を超えて遍在している。以前ライナの襲撃時に用いた、可能性の偏在を利用しての分身などとは根本的に違い、遍在しているスレイは、その全てが等しく真正正銘のスレイであり、ただ一つの魂を共有している。

この場合、スレイは不死不滅と言っても過言ではない。

何故なら、無限を超えて遍く存在するスレイを別々に殺す、しかも全くの同時に殺し尽くさなければ、スレイを殺したことになるのだ。

そして、クランドや最上級邪神イグナート、生前のヴェスタでもない限り、スレイに傷を負わせることさえ不可能だった。

まあ無限を超えて遍在することが可能といっても、今現在は、恋人の人数に合わせた数しかスレイは存在していないが。

「えーと、でもちよつと待って。それじゃあさ、今のスレイなら、各地の邪神対策も全部いっぺんに出来るんじゃないの？ それに、アスール火山にも行けるじゃないか。あと、アルファには当然会えないって言ったのはどういうこと……？」

「ああ、それはな。邪神対策にお前達を同行させ、成長してもらいたいっていう俺の我侭によるものだな。この世界の中では、流石のお前達も力を抑圧されているので、分身することは出来ても、

今の俺のように同時に別の場所に遍在する、なんていう芸当は不可能だろう？ アルファにしばらく会えない理由は、アルファがヘル王国の魔王城に行ったからだよ。俺としては、大陸東方の邪神対策を行う際にサイネリアを口説き落とすつもりだから、その時まで魔王城には行きたくないんだ」

スレイはあつさり答えた。  
あまりの内容に思わず沈黙する二匹。しかし気を取り直すと、デイザスターが思いついたように問う。

『ふむ。すると、今はまだアスール火山に行かないのも、後で我らを同行させる為か？』  
すると、スレイの笑みがどこか凄みを帯びる。

「いや、アスール火山には俺一人で行く。お前らを同行させるつもりはないな」  
「え？ それってどういう……」

矛盾を感じたフルールは戸惑いの声を上げる。  
「なに、不死鳥の特殊個体の捕獲は、ちよつとばかり本気でやるつもりなんでな」  
軽く告げるスレイ。

しかしその言葉に込められた力に反応して、身体を完全に制御している筈のデイザスターとフルールが、思わず戦闘態勢を取りかけてしまった。

そんな二匹のことなど気にも留めず、スレイは力の抜けた声で続ける。

「まあだが、それは後回しだ。とりあえず、村に入るとしようか」



相変わらず軽い調子で言われ、思わず脱力しかけるディザスターとフルール。

しかしこれは、普通であれば大したことなのだ。スレイの立場からすれば、本来なら気負いもな  
く言えるようなことではないのだから。

なにせ、ここはスレイの故郷でありながら、親しい友人などほとんどいない。かつてトレス村で  
過ごしていた頃、スレイは同年代の仲間の中で孤立さえしていた。尤も、スレイは全く気にもして  
いなかったが。

今回この地を訪れたのは、二人の師、クリスとアースに頼み事をする為だ。他のわざわざ村人達  
と接触する必要はない。

そこで当初は、師の家に直接転移してやればいいかとも思った。だがまあ、育ててもらった親や  
世話になった人達への義理は果たすべきだと思いついたのである。

まずは村長の家へ挨拶に行き、自宅に立ち寄り、その後でフィノの両親の墓参りをしてから、最  
後に師達の元へ赴こうという心算だ。

実のところ、フィノの両親については、今となつては少しばかり思うところがある。

何故なら、彼らは、フィノでもある、ロドリゲス二によつて、躊躇なく殺されたからだ。  
殺されたフィノの両親は善良で、スレイもよく可愛がつてもらつた。

一般的に考えて、我が子フィノに対しても良き親だつた。

子を虐待するようなことは微塵もなく、そこらの親達よりも、余程よくしていたと思う。

だが思い返してみれば、どこか空虚だつた。

そう、彼らは善良な人間であるが故に、与えられる限りで最高の環境をフィノに与えたが、そこ  
に愛というものが感じられなかつたと、今のスレイには思える。

その理由も察しがつく——フィノは最初から特異な存在だつた、ただそれだけのことだ。

邪神の転生者が、普通の生まれ方をした訳がない。

よく考えてみれば、フィノの出生時に産婆を務めたという老女も、つねにフィノに対して畏怖の  
視線を向けていた。

そう、フィノの両親も、我が子ながらフィノを怖れていたのだろう。恐らくは、フィノの誕生に  
際して何か余程のことがあつたのだ。

だというのに、フィノがああ小さな村で普通に受け入れられていたのは何故か。  
村は閉鎖的なコミュニティだ。

他ならぬスレイがそうだったように、異物は弾かれる。

フィノに対してそういった空気が全くなかつたのは、誕生にまつわる特殊な事情を両親が漏らす  
ことなく、産婆にも口止めをしたからだろう。

人の口に蓋をするのは並大抵のことではない。

産婆の求めに応じて、色々と便宜を図つてやつた可能性は高い。

実に善良な両親だ。

しかし善良ではあっても、彼らはフィノに、子供が親に最も強く求めるもの——すなわち心からの無償の愛だけは与えてやれなかった。

無理もないことだ。繰り返しになるが、フィノは邪神の転生である。その誕生時には、想像を絶する異変があったはずだ。

フィノの過剰な程の活発さ、明るさは、両親が自らに抱く恐怖を感じ取ってしまったが故の、その反動だったとも思える。

ロドリゲーニがフィノの両親を殺した理由は明白だ。

表面上はともかく、フィノの両親がフィノをどうしても愛せなかったのと同様に、それを感じていたフィノもまた、本当の意味で両親を愛せなかったのだ。

だから殺した。

フィノでもある。邪神ロドリゲーニにとって、本心から愛してもいない人の命など、どうでもよかったのだろう。

殺したのもただの気紛れ——命を奪っても奪わなくても、さしたる違いはない。

唯一の例外——フィノにとって間違いなく特別な存在であったのは、スレイとミレイの二人ぐらのものだ。

今のスレイには、この程度のことは容易く想像できてしまう。

フィノの両親に非はない。ただ不運だったただけだ。

可愛がってもらったスレイとしては、本当に優しいおじさんとおばさんだった。しかし申し訳ないが、敵を討つてやる訳にはいかない。

スレイの中では、フィノの両親よりもフィノとロドリゲーニ自身の方が、優先順位は高いのだ。

だからせめて、自己満足かもしれないが、その謝罪と世話になった感謝を伝える為に、墓参りをしようと考えた。

そこでふとスレイは気付く。

そういえば、墓前へのお供え物を用意していない。両親や村長夫婦への土産も忘れていた。

どれだけ頭が良くなるうが、俺は俺か。

そんなことを考え、また少し笑ってしまう。

『主?』

「スレイ?」

またも不思議そうに問いかけるディザスターとフルール。

「ああ、なんでもない……いや違うな、自分の生来の気の利かなさに笑ってしまった」

スレイが言うと、二匹はどちらも酷く奇妙な表情をする。

「? なんだ?」

『いや、主が気の利かない人間だというのは、どうにも賛同できかねると……』

「そうだよ。女の人には色んな意味で、まめに気を遣いまくりじゃないか」

「……そう言われると、返す言葉もないな」

思わず絶句し、深く納得するスレイ。

言われてみれば全くその通りだ。今回だって、普段女を口説く時の、万分の少しでも配慮があれば、準備万端に整えていたはずである。

「となると、俺は本格的に、どうしようもないやつってだけの何か」

くくつと笑うスレイを不思議そうに見つめるディザスターとフルール。

そんな調子で一行は歩き続け、トレス村の入口に近付いて行つた。

その途中、スレイとペット達に気付いた村人の劇的な反応は、実に面白かった。

最初は、こんな田舎に旅人なんて、と珍しがられた。

それが近付くにつれ、スレイの従えているペットが犬や鳥といった普通の動物ではないとわかると、やや警戒する素振りを見せた。

続いて、旅人の姿に既視感を覚えて「まさか」という表情になり、その内数人がスレイだと認識して驚いた。

しかし、足下にいる青い狼、右肩の白い小童に対しては、未知の存在に対する畏怖の念を顔に刻んだ。

だが、それも一瞬のことだった。

スレイより一回り以上も年上の大人達、そして小さな子供達は、歓声を上げて駆け寄つて来た。

「スレイツ！ スレイじゃないか!! 随分とまあ久しぶりだなあ!!」

「何言つとるんじや、お前は。スレイが旅立つてまだ一年にも満たないのじゃぞ？ この村と迷宮都市の距離を考えれば、なんとも早いお帰りではないか」

「うわあ、スレイ兄ちゃんだー!! ねえねえ、スレイ兄ちゃんつて今、凄い探索者なんだろ!!」

「すごいお兄ちゃん、格好良い!!」

「まさか、旅立って一年も経たずにSS級相当探索者になるとはな。史上最短記録なんだろ？ アーさんやクリスさんも、さぞ鼻が高いだろう。それとも悔しがつているかな。いや複雑そうだなあ」

「まあ何にせよ、スレイは村の誇りだ。世界中のどこにだって自慢できらあ」

「その子らが神獣ってやつかい？ 確かに、存在感からして別物だねえ？」

かつてのスレイは同年代の仲間内では孤立していたが、その分、年長者や子供達との付き合いが多かった。

しかしそれにしても、彼らのなんと気安いことだろうか。スレイ達が気配を抑えているとはいえ、ディザスターはどんな狼よりも峻烈な姿だし、フルールとて、愛らしく見えても竜である。

だがまあ、村人達がそんなことを気にしない理由は、彼らの言葉で容易に推測できた。

スレイがSS級相当探索者になり、しかも神獣を二匹も従えているという情報は、すでにここまですべて伝わっていたらしい。

通常、たとえ世界を驚愕させるような出来事であっても、こんな片田舎にまで、こんなにも早く



情報が伝わるというのは珍しい。あり得ないと言っても良い。

だが、アースとクリスは今でもフェンリルと連絡を取り合っている仲だ。ならば、そこからいち早く村に情報が伝わるのも当然だろう。

スレイは終始<sup>しじう</sup>明るい表情だ。

年長者に対しては敬意を払<sup>た</sup>って応え、子供達から掛けられる言葉には、優しく笑いながら返事をしていく。

ディザスターとフルールは、子供達が珍しそうに伸ばしてくる手を巧<sup>たく</sup>みに躲<sup>かわ</sup>しながら、ポカンと口を開けてスレイの様子を見つめていた。

それは、スレイが生まれて初めて戦いの舞台上上がった夜——フィノが死んだ夜以降、決して見せなかった姿だ。

スレイはそのまま、村の中へと進んで行った。

村人達も、仕事を放り出して付いて来る。

ただし、スレイと同年代と思<sup>おぼ</sup>えきグループだけは、ただ遠巻きに眺めているだけだった。

青年達は忌々<sup>いまいま</sup>しそうな、それでいて何かを恐れているような表情をしていた。少女達は遠慮<sup>えんよ</sup>がちに、スレイ一行を盗み見ている。

スレイは、じゃれついてくる子供達の頭を撫<sup>な</sup>でたりあやしたりしてやりながら、苦笑しつつ尋ねる。

「この子供達ともかく、立派な大人の方達が仕事を放り出して、いいんですか？」

「何を言う。久々に帰って来た村の同胞じゃ。仕事なんか後回しじゃ」

「それより、お前こそ両親やアースさんやクリスさんのところには行かないのか？」

「久々に帰郷したんです。順番としては、まず村長への挨拶でしょう？ 次に両親の所に顔を出して、それから師匠達のところに行きますよ」

軽く笑って答えるスレイ。

「はー、こりゃまた随分とまあ、大人になったもんだ」

「いや、こやつは昔から大人びてはおったじやる。まあ確かに、より洗練されたようじゃが、これが都会効果というやつかのう」

「ねーねー、にーちゃん、めーきゅーとしのモンスターってつよいー？ かっこいいー？」

「お兄さん、迷宮都市ってどんなところでしょうか？」

子供達から次々と繰り出される質問。

スレイは無難な答えを返しつつ、遠巻きに自分を見ている少女達の一人にふと目を向けた。

若草色の髪に茶色い瞳の美少女だった。片田舎の少女としては——いや、都会に出ても充分美人で通じるであろう。

スレイの場合、幼い時から格の違う美少女二人に囲まれていたので、目は肥<sup>へ</sup>えている。それに、信じられない程規格外の美女・美少女も無数に見てきている。

それよりか相対的に落ちるとはいえ、その少女——シリルという——も充分美人だ。スレイの守

備範囲内である。

なのでスレイは、何か言いたげにこちらを見ているシリルに、遠目から声をかけた。

「ん？ どうした、シリル？ 何か用か？ 話があるなら遠慮なく言ってくれ。美人との会話はいつでも歓迎だ」

「へ？」

一瞬、キョトンと目を丸くしたシリルは、少し躊躇した後、スレイの元に駆け寄って来た。

「あ、あのスレイ君。私の名前、知ってたの？」

「ん？ 当然だろ。俺が美人の名前を知らない訳がない。シリルのことは、村にいた時から気になってたさ」

「っ!？」

これは真っ赤な嘘である。

村にいた頃のスレイは、自分と同年代の人間に対して、極端なまでに無関心だった。

しかし昔ならともかく、今のスレイが同郷の美人の名前を知らないなど、自身のプライドが許さない。だから少しばかりズルをさせてもらった。

実際には、シリルを見て、その名を今「識」ったに過ぎない。

「ス、スレイ君って、噂通り本当に凄い女だったらしになっただね。昔はちよつといいかなくて感じる程度だったのに、今はなんか見るだけで惹き込まれそう。危ういの、どうしても見惚れちゃ

うような雰囲気。それもSS級相当探者になったから？」

「まあそんな感じかな。死線を幾つも潜り抜ければ、雰囲気なんてそりゃあ劇的に変わるさ。まあただ、女ったらしというのは否定しないが、一つ勘違いを正しておきたい。俺は口が上手いんじゃない、ちゃんとシリルにも本気だぞ？」

「なっ!？」

顔を真っ赤にして硬直するシリル。

そんなやりとりを見ていた他の少女達が、堰を切ったようにスレイに押し寄せてきた。

そのパワーに、周囲の大人も子供も思わず引いてしまう。

そこから少女達は我先にと、スレイに話しかけた。

もはやスレイは、ミーハーなファンに追っかけられるアイドルに近い状態だ。少女達は口々に様々な質問を投げかける。それに淀みなく答えつつ、同時に一人ひとり口説くのも忘れないスレイ。

もはや匠の技の領域だ。

それを見ていた大人達の一人が呆然と呟く。

「いやまあ、本気で変わったもんだ……色々な意味で。まあ娘っ子どもも、ちよつと態度が変わり過ぎだと思うが」

「同感だ。ただスレイはもともと人気あっただろ。例の二人に遠慮して誰も近づけなかっただけで……ただ流石に、ここまで派手にやられると引くがなあ」

大人達は呆れた声だ。

「しっかしスレイ、お前、度胸があるとか何というか。ミレイお嬢さんと恋人同士だったのに、よくもまあそこまで堂々と他の女を口説けるな。あんまりにも口が回るんで、びっくりしちまったぞ……ところで、お前はすごい女つたらしで、数え切れない程の美女と関係している、高貴な美しい姫達にまで手を出してる、って噂されているが、知ってるか？ ミレイお嬢さんどころか、アリシアの奴まで、その噂を聞いて滅茶苦茶怒ってたんだが。お前、怖くないのか？」

呆れつつそう尋ねたのは、スレイよりも一回り身体が大きく、スレイの両親と同年代の男だった。そのミレイも、幼い頃に指輪を買ってやった可愛い妹のような少女アリシアも、今はスレイの師匠クリスとアースのところで修行している。

彼女達がここにいないと「識」った上で、スレイは軽く笑い、堂々と嘯く。

「恋人だったも何も、今もミレイは俺の女だと思ってますし、アリシアも俺の女にするつもりですよ？ だいたい、嫉妬されるのは男冥利に尽きますね。一度や二度、刺されたって構わないと思ってますよ。別にその程度じゃ死にませんしね。しかしここにあの二人がいなのは残念だな。いたら、それこそ熱い抱擁を交わしたっていうのに。あ、でも俺としては、ここにいる可憐な少女達全員にも、俺の恋人になって欲しいと思ってますがね。本人達にその気があるならだけど」

まあ色々嘘や誤魔化しもあるが、基本的には全部本気なので問題ないだろう。ただ、痴情の纏れで女に一度や二度刺されたとして構わない、と思ってるのは事実だ。

実際は皮膚すら切れないだろうから、女の気が済むなら、わざと肉体強度を弱めて刃を通してやってもいい。どうせ回復するし。

何にせよ、もし今のミレイ達の気持ちからスレイから離れていようと、恋人はいないようだし、スレイは改めて口説き直すつもりだった。絶対にあの二人を自分のものにする、しかも完全に自分のものに——と既に決めている。

そういうえば、ミレイがクリスやアースの元に弟子入りしたのは聞いていたが、何故アリシアまで、そんなところで訓練しているのか。

スレイもそこまでは「視」なかつたので、詳しい事情を知らなかつた。

それはともかく、スレイと話していた少女達は、ミレイやアリシアの名を聞くと怯みかけたが、スレイはおどけた口調で更に口説き文句を続ける。

今やスレイの纏う、凄絶なまでに妖しいオーラの吸引力は、一介の村娘風情が抗えるものではない。少女達は頬を上気させ、スレイの近くに群がり続ける。

スレイとは一定距離を空け、嫉妬と畏怖の混じった視線で睨んでいる青年達は、ますます悪感情を募らせているが、スレイとしては正直どうでもいい。

『主よ……』

『何だ？ 俺は嘘など言っていないぞ。ミレイ達が「この場にいれば」、俺は間違いなく熱く抱擁し



ていたし、あいつらになら刺されても良いってのも事実だ。あいつらがここにいなくて残念なもの本当——まあただ、あいつらが「ここにはいない」ってことを既に知っていたってだけで」

ディザスターによる指向性の念話に、やはり念話で返すスレイ。

「おいおいスレイちゃん、あんたハーレムでも作る気かい？」

「ん？ もちろん俺はその気だが？」

呆れて聞く中年女性に平然と答えてみせるスレイに、啞然とする村人達。

しかし、ついに耐えかねたように、一人の青年がスレイの前に進み出て怒鳴りつけた。

「ふざけるな、お前っ。SS級相当探索者だか『黒刃』だか知らないが、何も出来ないままフィノに庇われて、フィノを死なせておいて、今更何をのうのうと」

フィノの名前が出たことで場が静まり返る。フィノの名を口にした青年自身は、スレイの圧倒的なオーラにあてられ、膝をガクガク震わせていた。

何せ村人達の沈黙は気まずさによるものだったが、スレイが静かになったのは、青年がフィノを呼び捨てにしたことへの苛立ちからなのだ。

抑えているとはいえ、オーラも威圧感を増そうというものだ。

「お、おい……」

慌てて止めに入ろうとした男の言葉を遮って、スレイが凄みのある声で言った。

「気に入らん。お前。誰の許しがあってフィノを呼び捨てにした？ 俺とミレイ以外、それを許

「された奴はいなかった筈だが？」

空気が張り詰め、誰もがプレッシャーを受けて、指一本動かせなくなる。

「まあ確かに、あの時の俺は無様にも何も出来ない小僧だった。その事実は認めよう。フィノの件も、俺が足手纏いになって殺されてしまったようなものだ。だからといって、お前達に何か出来たとも思えんがな？」

そもそも、あの時の俺は教師を目指す、ただの大好きの少年だった。人生の中で、未だ戦いという舞台に立っていないかった身だ。何かしようにも、出来なくて当然だ。意志さえあれば何でも出来るなんていうのは、戦いの舞台に立っている者にだけ通用する理屈だ。弱い奴は何も出来ず、強者が常に勝つ。まあそれがこの世の真理だな。そして今の俺には、出来ないことなど存在しないが？

とにかく、フィノが殺された時、僅かな時間だったが、俺も償いとして一生独身のまま彼女の墓を守っていたころと思った……何せ、フィノを殺した相手はとつくに俺の師達に殺され、復讐すら不可能だったんだからな。だがあの夜、あの夜に全ては変わった。俺の所為で死んだフィノが魔物と化し、自分の両親を殺した。俺は罪悪感に駆られた。フィノの暴走を止めなければならぬ、と思った。それは俺の贖罪であり義務ですらあると思えた。そこで俺は、ようやく戦いの舞台に立った。

そして俺は、こんな下らない運命も世界も何もかも全て叩き潰す、と決めた。それが俺に出来る償いであり復讐だとな。だから今の俺がある。戦いの舞台上上がったあの時から、俺は一度も敗北していないし、これからも俺の前には、無限を超えた先の果てまで続く、勝利の道だけがある。お

「前程度が何を言ったところで、か弱い小犬が吠えているだけにしか聞こえんな」

「そ、そんな自分勝手なっ!! どこまでフィノのことをっ!!」

朗々と己が価値観と生き方を述べるスレイに、青年が食ってかかる。

スレイは再び、「だからお前、誰の許可を得てフィノを呼び捨てにしている」と眉を顰めた。だがすぐに、こんな相手の言動を気にするのも馬鹿らしい、とばかりに肩を竦めて続ける。

「まあいい。お前風情に構うだけ時間の無駄だ。それに幸い、俺は探索者になってから良い情報を手に入れてな。あの夜見たフィノの姿から、フィノを生き返らせる手段があることがわかった。皮肉なことに、それはフィノが魔物化をしたからなんだが。あの魔物は特殊な部類でな、フィノは新鮮な肉体と魂を保持したままにいる。おかげで特殊な方法を使えば、魔物化を解いた上でフィノを生き返らせることも可能なんだ」

「な、何っ!？」

青年が叫ぶと同時に、村人達は一斉にどよめく。

その一方で、今度はディザスターとフルールが、二匹揃って呆れた思念を送ってきた。

『主よ……』

『スレイ……』

しかしスレイは、念話でやはり飄々と返した。

『なんだ。少々脚色してはいるが、結果としては一緒だろ？ ロドリゲニを倒した上で、よりフィ



ノの面が強くなるようにしてやればいいだけのことだ』

先程スレイに突っかかってきた青年は、更に興奮する。

「フィ、フィノが生き返るだつてっ!! ほ、本当なのかつ!？」

スレイは僅かに記録を「拾」って見た。

すると、この青年は、同年代の中でも殊更スレイへの当たりが強かった相手だとわかった。加えて、フィノに最もちょっかいを出していたのも、この青年だったと「識」る。

つまり、彼はフィノに過剰な好意を抱いていたらしい。

名前や詳細はどうでもいいので「拾」っていない。だがまあ、この様子を見れば、今でもまだフィノに対する想いは変わっていない、どころか、ますます想いを募らせているのだろう。

興味もないが、スレイは淡々と事実のみ確認する。

そして、こんな気にするだけ時間の無駄だと、もはやフィノの呼び方も含めて無視することにしたスレイは、事実を適当に折り混ぜた作り話を、周囲の村人全員に聞こえるように話す。

「ああ、フィノは高い確率で生き返るだろう。死した直後、肉体がほぼ無傷で魂も肉体から離れていない状態であれば、最上級の回復魔法と時間魔法を融合した蘇生魔法を駆使して、死からの蘇生も可能だという。限られた高位の探索者にも可能な話だがな。それは本来なら迷宮システムの影響による副次的効果によるものらしい。

詳しい説明は省くが、あの夜、フィノが化身したのは、「奇跡的」にも、迷宮システムの影響を

受けた高位の探索者が肉体と魂を保持した状態と、ほぼ同じ状態にある魔物だった。これは偶然、探索者ギルドの資料でわかったんだが、その資料には、フィノと同じように人間の死体から化身した魔物が、高位の探索者の無傷の死体と類似していることから、蘇生魔法による魔物から人間への回帰蘇生が可能かどうか実験し、成功したとあった。だからまあ、蘇生の条件は揃っている。前例はその一例のみらしいから、確実とは言えないが、多分可能だろう。

それに、今のフィノを倒せる程の力を持つ存在はごく限られているから、恐らくフィノが化身した魔物は無事だろう。もし魔物による被害者が出ていたら申し訳ないとは思うが、俺にとっては都合だ。仮にも俺はSS級相当探索者なのでな、知り合いに心当たりがある。あとは俺がフィノを捕まえて、その知り合いに蘇生魔法を掛けてもらえば、フィノは魔物から人間へ回帰し蘇生するだろう。今の俺の目的の一つはこれだな」

スレイは、肩を竦めて笑ってみせる。

「お、おい、そいつぁマジかよ」

「フィ、フィノちゃんか?」

戸惑ったような、喜んでいような微妙な表情でどよめく村人達。先の青年などは涙さえ流している。

まあ過去を鑑みるに、この村でのフィノの人気と人望の篤さからいって当然かと考えつつ、スレイは続ける。

「まあ、何にせよ、SS級相当探索者の俺なら実現可能だろう。いつになるとは言えんが、期待して待つてる。どのみち、あいつも俺の女にするんだ。全部俺が責任を持つさ」

「な、なんだと……っ!？」

激昂しかけた先の青年だが、スレイの笑みを見ると何も言えなくなって黙り込む。

スレイは一見笑っているだけのように見える。だがその目を見た青年は、得体のしれない奇妙な感覚に襲われた。恐怖とか畏怖とか、そんなものなど比較にならない何かだ。

無視することにしたとはいえ、流石に鬱陶しく感じたスレイは、片手間に、彼のみを対象に、正気を失わない程度に威圧したのだ。

そしてスレイはゆっくりと歩を進めた。

周囲の村人達も我に返ったように大きく騒ぎ始め、スレイに様々な疑問を浴びせてくるが、スレイは軽妙に受け答えしながら歩き続ける。

『主よ、随分とまあ、いい加減なことを言うものだ……』

『本当、スレイって口が上手いよね』

『何を言う。俺が吐いた明らかな嘘は二つだけじゃないか。実際のところ、フィノは魔物なんかじゃなくて、邪神ロドリゲーニになったということ。さっき俺が語ったような、都合の良い魔物なんかこの世界には存在しないってこと。ただそれだけだ。蘇生魔法は実在するし……まあジンやサクヤでも使えるかどうかわからんし、使えるかどうかをわざわざ「識」ろうともしてないが、蘇生魔法

を使えそうではあるから、心当たりがあるのは事実だろう？ それに何より、大分昔の話ではあるが、その魔法で蘇生した高位探索者がいたことも事実だしな』

ディザスターとフルールの非難に対し、スレイは相変わらず飄々と返し、こう続ける。

『何よりこれで、邪神ロドリゲーニとなったフィノを、元のフィノ側に偏るように調教した後、この村に連れて帰っても問題のない下地を作った訳だ。本題のついでに別の目的も済ませちゃうんだから、流石俺だな』

『主……』

『スレイ……』

呆れて言葉もないディザスターとフルールを無視し、自画自賛して悦に入るスレイ。その足取りは軽い。

スレイは余裕の態度でのんびりと、懐かしい故郷ののどかな景色を楽しみながら歩いて行った。そして村長の家に辿り着くと、周囲の人々に向けて告げる。

「それじゃあ、俺は村長に挨拶してきます。皆さんがここにいと、村長と奥さんに迷惑をかけるだけかと思えますから、仕事に戻っていただければと。何か話があれば、村長の方からあるでしょうし……ただ、ちょっと例外として、可憐な女の子達とお喋りはいつでも歓迎なんで、気軽に声をかけてくれたら嬉しいかな？ 先刻も言った通り、俺は村長に挨拶した後、実家に顔を出し、それから師達のところに行きますので」

静かな、しかしよく通る声で告げたスレイ。またもぎわめく村人達を無視し、スレイは周囲の騒音に負けないよう、やや強めに村長宅の玄関のドアをノックした。

「はい」

奥から明るい返事が聞こえた。暫くするとドアが開かれ、腰まである金髪に碧眼の、色気のある大人の美女が現れた。

「えーと、ミレニアムさん？」

スレイは流石に少しばかり意表を突かれた。

容色が衰え始める筈の年齢である彼女が、少し村を離れていた間に、若々しく美しさを増したように見えたからだ。

「あら、あらあらあら？ スレイ君じゃない。本当に久しぶり。いつ帰ってきたの？ ああ、そういえばSS級相当探索者になったんですって？ 凄いわね、大出世じゃない。敬語とか使った方がいいのかしら？」

「いえ、別にそんな大層なものじゃないですから、昔通りでお願いします」

全く動じる様子のないミレニアムに、スレイはやや苦笑を浮かべて返す。

「そう？ それじゃあそうさせてもらうわね。息子みたいなスレイ君を相手に、敬語を使うのもどうかと思っただから、よかつたわ。ところで、後ろの皆さんはいつだったのかしら？」

ミレニアムは嬉しそうに笑うと、周囲に集まっている村人達を見て不思議そうな目を向けた。そ

の柔らかくおっとりとした視線に、村人達はやや慌てたように何やら色々と言い訳をしようとす

「ああ、彼らも久しぶりに俺が帰還したのが珍しいらしくて、色々聞かれてたんですよ。でも流石にもうそろそろ『仕事に戻らないといけない』らしいので、気にする必要はないですよ。それより、俺は暫く振りの帰郷ですから、まず村長さんに挨拶に来たんですが、上げてもらっても？」

「あら、そうだったの。そうよね、久しぶりな上に、迷宮都市まで行っていたスレイ君の話聞きながら人は多いわよね。でも、もちろんお仕事の方が大事ですよ。それじゃあ皆さん、いつも通り、お仕事頑張ってくださいね。それとスレイ君、そんな他人行儀に遠慮しないでいいのよ？」

ミレニアムがにこやかな笑顔で解散を促したので、村人達は三々五々散っていった。

子供達は、帰りがけも明るくスレイに声をかける。

「それじゃあ兄ちゃん、後であそんでよー」

「お兄ちゃん、またあとであえるよね？」

「なあなあ、ひさしぶりにあそぼうぜー」

「はは、用事が終わったら是非遊びたいんだが、俺も忙しくてな。また今度な？」  
ぐずる子もいたが、スレイはなんとか皆をなだめて帰す。

「あらあら、相変わらずスレイ君は子供に人気ね？」

「いや、子供しか遊んでくれる相手がいなかったっただけなんですけどね」

苦笑しつつ答えるスレイ。村人が去って静かになると、ディザスターとフルールがやはり呆れた

声で語りかけてきた。

『主よ、相手によって対応が変わり過ぎた』

「もう別人だよー」

スレイはただ笑みを浮かべるのみで黙殺した。

一方のミレニウムは驚き、キョトンとして目を見開いている。

今のディザスターとフルールの言葉は、周囲にも聞こえるように発声されたものだったので、当然だろう。

スレイは「しまった」などとは思わない。

ディザスターもフルールも、彼女にはこの程度のことをしても何ら問題はないと、識った上で、わざとやったはずだ。

ただ――。

「あらあら、まあまあ、その狼ちゃんと小竜ちゃんが、噂で聞いた神獣なのね？ 可愛いわねえ。触っても大丈夫かしら」

この反応には、二匹とも少々戸惑っていたようだ。

目を輝かせているミレニウムに、ディザスターもフルールも明らかに引いている。

スレイは、主としては二匹をフォローしてやるべきだろうと思いついて、申し訳なさそうに断りを述べる。「すみません。こいつらは俺以外に触られるのを非常に嫌がるもので、勘弁してやってくれませ

んか？」

「そう……残念だけど、神獣なものね。主以外には手を触れさせないという矜持があるんでしょね。ごめんなさいね、狼さんに小竜さん。私はミレニウム、この村の村長、レイルの妻よ」

ディザスターとフルールがスレイに感謝の視線を向けてくる。

鷹揚に頷くスレイ。

それを見て、ディザスターとフルールはそれぞれミレニウムと挨拶を交わす。

『ふむ、いや我らの意思を尊重してもらえるのであれば問題ない。ご夫人、我はディザスター、主に仕える者だ』

「うん、ちゃんとわかっているなら全然問題ないよー。僕はフルール、やっぱりスレイに仕えてる立場だね」

ミレニウムも微笑みながら言葉を返した。

「ご丁寧ありがとうございます、ディザスターさんにフルールちゃん。でも本当に神獣を、しかも二匹も従えてるなんて、スレイ君やっぱり凄いのねえ」

「いえ、そんなことは。色々幸運に恵まれた結果です。それで申し訳ありませんが、村長にご挨拶したいので、いいですか？」

「あら、ごめんなさいね、ついつい脱線しちゃって。それじゃあ付いて来てもらえるかしら」  
そう言って家の奥へと案内するミレニウムに、スレイ達も続く。

簡素な造りの家だが広々として、室内の内装や家具の質も良い。クリスとアースの家を除けば、この村で一番の豪邸だ。

ミレイの実家でもあり、スレイにとっては、郷愁を掻き立てられる建物だった。

二階に上がると、ミレニアムは扉をノックし、中のレイルに声をかけた。

「あなた、お客さんなんだけど、いいかしら？」

「来客？ 特に予定はなかったと思ったが」

片田舎の村長ではあっても、来訪者は事前にアポをとって来るしきたりになっているようだ。

だがミレニアムは気にする素振りもなく、あっさりと告げる。

「それがねえ、今日突然スレイ君が帰って来たのよ。それであなたにご挨拶したいそうだから」

「なにつ!？」

驚いたような声が聞こえてくる。

変化に乏しい村では、スレイの帰還も一大事なのだ。

「……わかった、入ってもらいなさい。それとミレニアム、お前はお茶を」

「はい、それじゃあスレイ君、入って待っててね」

ミレニアムはニッコリ笑うと、一階へ下りていく。

「では遠慮なく……それでは失礼します」

スレイが声をかけながら扉を開くと、机の上の書類を相手に執務中だったレイルが、慌てて立ち

上がるのを見えた。片田舎の村らしく、書類の量は少ない。

肩まで届く金髪に碧眼の、美系の男だ。見た目の通り、年は四十代半ばである。

妻のミレニアムと同年代であるが、レイルの方は少しばかり老けたように見える。

「あ、レイルさんはそのままです。お久しぶりです、レイルさん。今回は用事があった村に帰って来たのですが、まずはレイルさんに挨拶するのが筋だろうと思いい、こちらへ寄らせていただきました」  
スレイにとっては、レイルも昔馴染みの人物だ。随分と世話にもなった。だがミレイとの一件があり、村を出る前はやや疎遠になっていたのだ。

だから今回も、つい丁寧な挨拶をしてしまう。相手は村長であるから、昔から、スレイが自らの立場を弁えて接していたというのもあるが。

しかしまあ少しやり過ぎたようだ。

スレイの物言い、そして仕草に、レイルは少しばかり呆気にとられたようだった。しかし、すぐに気を取り直して挨拶を返す。

「ああ、本当に久しぶりだね。しかし仮にもSS級相当探索者にまでなった君が、たかが片田舎の村長相手にそれ程礼を尽くさなくても」

「いえ、昔お世話になった身ですから。それに何より、レイルさんは俺が育ったこの村の村長です。ですから、昔のように気軽に、スレイと呼び捨てにしていただければ」

低姿勢を崩さないスレイだが、その身に自然と纏うオーラは、物静かながら凄絶で、レイルはや



はり気圧けいあつされてしまう。

「そ、それよりも早く座りたまえ。君にいつまでも立たれていては、私が落ち着かない」

「はい、それではお言葉に甘えて。あ、レイルさんはそちらの執務席にいらしたままで構いません。今回はご挨拶うかがいに伺っただけですので」

そう言ってスレイは、こちらに出てこようとしたレイルを軽く手で制した。

「……ああ、わかった。では、そうさせてもらおう」

スレイは、来客用のテーブル席に静かに座る。

ディザスターとフルールは当然のようにスレイに付き従っている。

そんな二匹を目にしたレイルは、ミレニウムと違って平然としていられなかった。あからさまに畏怖の視線を向けている。

「で、そちらが噂に聞く神獣かね？」

『うむ、我はディザスターという』

「僕はフルールだよ」

スレイの足下にリラックスして待まちてるディザスターと、スレイの右肩に鎮座するフルールが軽く挨拶すると、レイルは哑然とした表情でただ頷くしかない。

ディザスターもフルールも、常人に影響を与えない程度にその力を抑えているので、レイルは気圧されたという訳ではない。二匹が発する圧倒的な存在感と、そのどこかコミカルな自己紹介とに

ギヤップを感じ、驚いたのだ。

気を取り直したレイルはスレイに向き直って言う。

「正直、君を幼い頃から見てきた私としては、なんというか、親しみの情を持っていた。娘のミレイと君との関係については複雑な思いもあるが、こうして顔を合わせてみると、やはり懐かしい。だからこそ、この村を出て一年も経たぬというのに、SS級相当探索者にまで上り詰めたことに困惑すら覚えているよ。しかも神獣を二匹も従えるとは……とんでもないにも程があるな。君のその異常なまでの成長ぶりには、もはや感嘆を通り越して呆れてしまう程だ。アース殿の家に引きこもって本ばかり読んでいたあの君が、とね。しかもフィノ君が殺された後の君……いや違うな。あの時の君はフィノ君の死を悲しみ、そして同時に罪悪感を抱いていたようだが、以前のままであった。君が変わったのは、魔物となったフィノ君が両親を殺した晩からか。あれで一気に関わり果てたと思っただが、今の君は、村を出た時よりも更に変わった。ただ驚くばかりだよ」

「はは、まあSS級相当探索者になったことも、ペット二匹についても、俺は特別ですからね。そしてまあ、確かに色々変化した、という自覚はあります」

軽く首を振って驚きを表現するレイルに、苦笑して答えるスレイ。しかしふいに真剣な表情になり、こう続ける。

「ミレイのことは、レイルさんの希望に沿う形にはなれないと思いますが、今でも真剣に考えていますよ」

「それはどういう——」

その時、ドアがノックされ、ミレニアムがティーセットを持って入って来た。

「あなた、スレイ君、お茶を持ってきたわよ」

にこやかに言う、ミレニアムは執務用の机と来客用のテーブルにカップを置き、お茶を注ぐ。札を述べるスレイと、妻を労うスレイ。

ふと、ミレニアムはスレイに告げる。

「先程のお話、偶然聞こえちゃったんだけど、ミレイについてはあの娘自身の問題だから、あまり詮索したり干渉したりしないで、ほどほどにね？ あの娘だってもう子供じゃないんだから」

「む、う……」

妻に諭され、呻くスレイ。そして首を振りながら溜息を吐くと、一つ頷いてミレニアムに告げた。「わかった。親が子の心配をするのは当然の権利だとは思いますが、過度な干渉はするべきではないのだろうな。感情的にはやや納得できませんが……それでは、これからまだ少し重要な話があるから、ミレニアムは退出していなさい」

「ふふ、わかりました、あなた。それじゃあスレイ君、また後で」

ミレニアムはスレイの言いつけに従い、部屋を後にした。

スレイはまた溜息を吐く。

「さて、それではミレイのことはいいだろう。代わりに、この村の村長として聞かせてもらおう。

今回の帰還の目的は何かね？」

「ええ、アース師とクリス師に用事がありました」

二人の名が出ると、僅かに苦々しげな表情を浮かべるスレイ。

それを目ざとく捉えたスレイは、娘がアースとクリスの下で探索者になる為の鍛錬を積んでいるのが、村長としても父親としても望ましくないのだろうな、とスレイの心情を察した。

察しはしても、別に何とも思わないが。

スレイは更にスレイに問いかける。

「それで、アース殿とクリス殿への用件とは？」

SS級相当探索者にまでなったスレイが、明確な目的を持って、二人を訪ねようとしているのだ。この村の村長としては、事情を知っておきたい。

尤も、もしスレイが回答を拒んだなら、それ以上追及するのは不可能だとわかっていてもいたが、スレイは拍子抜けする程あっさりと答えた。

「いえ、簡単な用件ですよ。アース師とクリス師にお願いして、フェンリルに取り次いでもらいたいと思いませんか。俺はフェンリルともアイス王とも面識はありますが、だからといって何の آپポイントメントもなしに、突然押しかける訳にもいけませんよ？」

「なっ!？」

思わず僅かに腰を浮かすスレイ。

## 立ち読みサンプル はここまで

シチリア王国の宮廷騎士団団長兼宮廷魔術師団長を気軽に呼び捨てにし、尚且つ、国王その人も知り合いだというスレイに驚愕したのだ。

だがすぐに落ち着きを取り戻し、再び椅子に腰を落ち着ける。冷静に考えれば、別に不思議なことではない。

なにせスレイは、今やSS級相当探索者。しかも、歴史に類を見ない神獣二匹を従える、特別な存在でもある。たとえ大国の王にタメ口を叩いたとしても、誰に咎められることもないだろう。

幼少期からよく知っている青年が規格外に成長していることをレイルは改めて理解し、思わずこめかみを押さえた。

レイルが頭痛を鎮めようとしている間に、スレイはゆったりとくつろぎながらお茶を飲み干していた。ミレニウムが淹れてくれた茶だ。残す訳にはいかない、と思ったのだ。

そんなスレイに、ようやく落ち着きを取り戻したレイルが問う。

「フェンリル様とアイス国王陛下に対する用件とは何なのか、聞いても？」

「流石に細かい所までは話せませんが、この国の防衛に関すること、とだけ」

スレイは気軽な様子で答えた。

レイルは、スレイが国防などという重大問題に関して国のトップに意見するという話にやはり現実感が湧かず、またも頭痛を覚える。

しかしこれもスレイの肩書きを思えば、当然なのかもしれない。

それにしても、この国の国防に関する話とは、いったい何なのか。そうも思ったが、これ以上尋ねてもスレイははぐらかすだけだろう、とレイルは追及を諦めた。

何より、国防問題など自分の手に余ると理解したのだ。

レイルは結局のところ、片田舎の村長に過ぎない。アースやクリスといった、王宮に仕えた経験のある村人がいるお陰で多少は国の事情に明るいのが、所詮はその程度だ。

レイルは頭を切り替えることにした。

「それでは、この後すぐにアース殿とクリス殿の元へ？」

レイルが問うと、スレイは、いえ、と軽く否定した。

「まずは実家に寄ろうかと。せっかく帰郷したのに、両親に挨拶もしないとは薄情にも程があるでしょう」

「なるほど、確かにそうだな」

納得して頷くレイル。ようやく理解がしやすい話が聞けて、心も安らぐ。

「だけど」とスレイが続けた。

「父と母の場合、挨拶に寄れば喜んでくれるでしょうけど、別に寄らなくても気にしない人達ですからね。まあ、これに関しては、俺自身が本当に久しぶりに両親に会いたいと思っただけです」

「……そういえば、あの二人はそういう人間だったね」

レイルは額に手をやり、溜息を零す。スレイの両親は、村人の中でもかなりの変わり者だと思い